

購買8割の影響者

CONSUMER REPORTS OF WOMEN

女性たちのリアルから“あした”を予測する

HERSTORY REVIEW

1月のキーワード

NEW
YEAR

結構いいね！ 新習慣 2021

ニューノーマル
Lover ラバー消費

女性消費者動向トレンドセット！

1 HERSTORY REVIEW
本誌(PDF)

2 女性消費者動向
セミナー(オンデマンド配信)

3 女性消費者
調査データ(PDF)

JANUARY
2021
VOL.42

1

女性消費者動向

新しい買物行動を
継続したい9割超！

特集

ニューノーマルラバーに
選ばれた理由

コロナ禍に
成長の秘儀



CASE1

SOELU
SOELU株式会社



CASE2

セカンドストリート
株式会社ゲオホールディングス

女性視点マーケティング最前線

Marke-Jinに聞く

体を知り、コントロールすることで
100年人生を快適に働き、暮らす

対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座・新宿
理事長 対馬ルリ子



ペルソナ10タイプのライフスタイルの“今”が視える
ペルソナ別トレンドレポート



Profile

対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座・新宿
理事長

つし ま こ
対馬ルリ子

産婦人科医師、医学博士、医療法人社団 ウィミンズ・ウェルネス理事長。青森県生まれ。1984年に東京大学医学部産婦人科学教室入局。都立墨東病院総合周産期センター産婦人科医長、女性のための生涯医療センター ViVi初代所長を経て、2002年にウィミンズ・ウェルネス銀座クリニックを開院。2003年に女性の生涯にわたる健康を推進するNPO法人「女性医療ネットワーク」を設立、全国約600名の医師、医療保健関係者と連携し、さまざまな啓発活動や政策提言を行っている。コロナ禍の2020年秋には、女性を支援する団体活動を発掘、支援していく国の法制化を目指す民間活動「一般財団法人 日本女性財団」を設立。

対馬ルリ子女性ライフクリニック <http://w-wellness.com>

VOL.29 女性視点マーケティング最前線

Marke-Jinに聞く

「女性のヘルスケア」がマーケットに 体を知り、コントロールすることで 100年人生を快適に働き、暮らす

女性のカラダと心を考えるのは、女性のためだけではでない。男性的な働き方の社会を変え、人生100年時代を快適に働き、暮らすことにもつながる。そして、未開の分野だった「女性が考える女性のニーズ」は大きなビジネスチャンスになる。

そう語り、女性の心と体をトータルに支援し続ける対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座・新宿理事長の対馬ルリ子さんに、ヘルスケアを軸に社会を活性化させる方法などについて伺った。

健康長寿の日本ならではの 「ヘルスケア」は一大産業に

私は20年前からウィメンズヘルス、つまり女性のヘルスケア分野と医療をつなげることを行ってきましたが、ビジネスや経済と医療がつながっていないことを残念に思っています。いま日本は、男女格差を測るジェンダーギャップ指数が153カ国中121位にまで落ち、並行するように国の成長の柱だった「ものづくり産業」は下降線をたどっています。この現状を打開するカギの一つは、注目が高まっているヘルスケア分野にあると考えます。「健康長寿で幸せに長く活躍したい。」それは世界中の人が目指すことです。海外から見ると、日本人は健康で清潔、長生きで真面目といったイメージを持たれています。60歳で「美魔女」と呼ばれる女性がいるたり、80歳、90歳になってもカッコイイ女性、男性がいることは一つの看板になるでしょう。ヘルスケアがうまく行くと、女性は快適に子どもを産み育てられ、男女とも快適に働き、更年期や老年期も元気に過ごせます。この分野を切り開けば日本はどんどん活性化し、世界に売り出せる一大産業になると思います。

日本の女性医療現場は40年遅れ 北欧では「かかりつけ産科医」も

私が産婦人科医をめざしたのは、1960年代後半にアメリカで女性グループが発刊した革命的なベストセラー『Ourbody Ourselves』を読み、「女性が主役の医療をやろう。現場で女性を助けよう」と思ったからです。日本の女性医療に関する現場は各国に比べて約40年遅れています。一番進んでいるのは北欧。中でもスウェーデンでは3歳くらいから理解度や発達段階に合わせて性教育が行われ、「自分の生き方」について性差ではなく人との関係性の中で学びます。フランスでは女の子が15歳になるとかかりつけの産婦人科医を持つことが国の制度として決められています。月経の始まりとともにホルモンが働いて体が変化する時期から気持ちや体の変化について相談できることで、気分のアップダウンや体の変調も少なくなっていく暮らしやすくなる。つまり、ダウNTAイムがなくなるのです。女性は、妊娠・中絶・出産に命がかかります。妊娠・出産を自分でコントロールできないと、教育や就労に影響が出たり、地域で尊厳を持って生きていくことが難しくなること

もあります。スウェーデンやフランスも、昔は日本同様に男女間のギャップがありましたが、女性が声をあげて是正してきた歴史があります。日本の女性は違和感を感じながらも声が届かないと諦め、我慢している。もっと声をあげていいと思います。

自分の体を知り、“話せる”アプリ 「AIルリ子先生」2021年リリース予定

どんな女性でも気軽に相談できるように、オンライン診療も行っていますし、新宿は伊勢丹の中に、予約せずとも来院できる“ウォークインクリニック”を開設しています。これからも当事者目線で女性の医療を組み換えて、その人がその人らしく生きていけるようサポートしていくのが私の考えです。今、取り組んでいるのが、スマホで24時間やり取りができるアプリ「AIルリ子先生」。質問に答えたり、「辛い時は我慢しなくていいよ」と声を掛けたり、緊急事態には「すぐ病院へ」と背中を押してあげるものです。AIの習熟度を高めており、2021年のリリースを目指しています。女性が自分の体を知り、コントロールすることが新しい習慣になるようサポートします。

今までは男性の働き方で誰もが同じように働く企業社会でしたが、働く女性の増加に伴い、企業でも女性の健康管理に対する意識が高まるでしょう。女性はホルモンの影響で感情が不安定になったり自律神経や免疫が変動したりしますが、そのおかげで命が守られています。男性にはそういった愁訴がなくハードに働き続けられますが、心筋梗塞やがんは女性より多く、短命です。それぞれの強みと弱み、得意不得意を補い合って柔軟な組織を作ること、ダイバーシティにもつながります。

「ヘルスプラン」を作って 人生100年時代を豊かに暮らす

ヘルスプランは、キャリアプランやファイナンシャルプランと同じように誰もが作るべきです。どんな体も年とともに疲労し、故障が増えます。健康を考えることは自分の心の中やアイデンティティ、生きる意味を考え、生き方を自分で決めるトレーニングでもあります。人生100年の今、長い時間を使い切り、自分が宿っている体を上手に使いこなして個性的に生きられたらいいですね。ただ、そのためのリテラシーや健康に関心を持つ人をサポートする専門家が圧倒的に足りません。そこで人材育成にも取り組

んでいます。

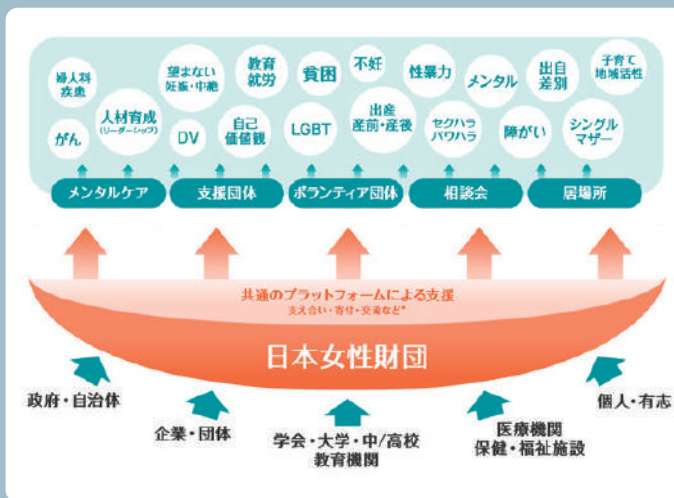
2003年に、女性の心と体、社会とのかかわりを総合的に捉えるNPO法人「女性医療ネットワーク」を設立しました。全国約600名の女性医師・女性医療者と連携して情報提供や啓発活動を行っています。女性健康学校「ジョイ・ラボ」で31回の講座を受講すれば、ヘルスケアに対する資格「女性の健康総合アドバイザー」を取得できます。女性の当事者目線で生涯、健康支援をしたいと思う方はどなたでも入ることができます。また、2020年は、コロナ禍で様々な女性たちの課題を解決する全国の団体の多くを包括的に支援する必要性を感じ、「一般財団法人 日本女性財団」を立ち上げました。これからは横連携で民間から行政へと働き掛けることが急務と感じています。

「女性が考える女性のニーズ」はものすごくたくさんあります。今までの男性目線の社会では「ないもの」とされてきた未開の分野だけに、フェムテックと言われるテクノロジー分野も発達している今、まさしくビジネスチャンス到来。コロナ禍で社会環境などを含めて変化せざるを得ない今こそ、「変わるタイミング」です。



一般財団法人 日本女性財団

<https://www.japan-women-foundation.org/>



女性たちの抱えている課題を解決・支援する様々な団体を横連携して国の制度化などを目指す財団を2020年に立ち上げた。公益法人を目指している。
参画したい方は、個人・法人共にお問合せください

見えていなかったニーズや課題を掘り起こし、解決し、そこまでの道筋を見える化すれば、大きな世界貢献にもなります。これまで低く頭をかがめてきた日本の女性たち、ぜひ思い切ってジャンプして！



銀座本院以外に、伊勢丹新宿店の地下2階に予約不要のウォークインクリニックを開設。気軽に女性たちの悩みに答える場を作っている



書籍「閉経」のホントがわかる本
2020年9月に発売の本書は女性の言いにこなかった悩みに答えて大ヒット

インタビューを終えて…



HERSTORY REVIEW発行人 日野佳恵子

2021年、新年号にふさわしい方として Marke-Jin のインタビューは、女性クリニックのドクターの対馬ルリ子先生にお願いした。その理由は、これから女性の心身に関するマーケットが急速に成長するからだ。また、そうあってほしいという願いもある。近年、働く女性が急激に増えながら、日本は、「働く女性」マーケットへの理解、経験が極端に少ない国。いまだに世界先進国中、家事育児労働時間は、女性が世界一長く、男性が世界一短い国だとご存じだろうか。女性の就業率だけが上がっているいびつさは、女性の心身への荷重負担を起し、社会問題が表面化している。2021年からは優先課題に必ずなると予測する。